

その 4

太宰府と太宰治



都祢比等能 故布登伊敷欲利波 安麻里尔豆 和礼波之奴倍久 奈里尔多良受也

「常人(つねひと)の 恋ふといふよりは 余りにて 我は死ぬべく なりにたらずや」

(世の人がいう恋する想いを越えて、もう、私は死にそうになっているのではなからうか)

大伴坂上郎女(巻 18・4080)

新元号「令和」が万葉集から引用されたことから、子供の名前を万葉集から取るのが今トレンドらしい。その場合どんな歌から引用するかということになる。挽歌はもちろん論外だが、相聞歌も恋の切なさを詠う歌が多いのであまりよくない。お薦めは、万葉の美しい自然を詠った歌はいかが、という。例えば、ストレートに「万葉(まよ)」とか、令和由来の「令人」、「令華」や梅花の歌の序から取って「梅生」、「梅香」、「蘭子」、「薫」とか。また、誰の歌からかお分かりと思うが、「茜」、「紫野(しの)」(額田王 巻 1・20)とか、他に「明日香」、「春日」、「清花」、「春菜」、「萌」、「弓弦」など等、いくつも例が挙げられている。

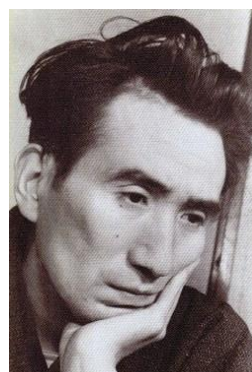
名前はともかく、姓の方は自分では選べないので、引用するとなると芸名やペンネームということになる。当初宝塚歌劇団の芸名は万葉集や百人一首から命名されたことから、八千草薫、浜木綿子、淡島千景、新珠三千代、扇千景など等思い出に残る女優たちの名はいずれも優雅で美しい。中でも、まだ現役の女優で、元宝塚のトップスター春野寿美礼の名は、ほぼ山部赤人の歌そのままである。

「春の野にすみれ(春野尔須美礼)摘みにと来し我そ野をなつかしみ一夜寝にける」(巻 8・1424)

男では誰か、ということになると、真っ先に思い浮かぶのが、太宰治だろう。「太宰」と聞くと、反射的に「太宰府」。太宰本人も、太宰府ゆかりの「万葉集からいただいた」と言っている。昭和 23 年 5 月発行の雑誌「大映ファン」のインタビュー記事の中で、「ペンネームの由来をお聴かせ下さい」という単刀直入な質

間に、本名津島修治こと太宰はこう答えている。

「友だちが考へてくれたんですが、万葉集をめくつて、初め、柿本人麻呂から、柿本修治はどうかといふんですが、柿本修治は、どうもね。そのうち、太宰権帥大伴の何とかつて云ふ人が、酒の歌を詠つてみたので、酒が好きだから、これがいゝつていふわけで、太宰。修治は、どちらも、おさめるで、二つはいらないといふので太宰治としたのです」。



「太宰権帥大伴の何とか」は、万葉集に 78 首の歌を残した大伴旅人のことで、この「太宰権帥」から取ったという。ただし、確かに太宰本人が話しているのにもかかわらず、命名の由来については諸説あって、このインタビューも、「太宰特有の嘘で、面白がって言っているだけ」という説もあり、いかにも太宰らしくて「面白い」。中学時代の日記にちょっとエッチなことを書くところで万葉仮名を使っていたとか、若い頃から万葉集を好きで愛読していたらしいとか言われるが、「友だちが考へてくれた」とか、「大伴の何とか」とか、言っているところを見ると甚だ心許ない。どうにも、太宰と万葉集のつながりが判然としない。ペンネーム以外に、太宰の作品には万葉集との接点が出てきていないのだ。少なくとも、作品の中に万葉秀歌等を引用した例を見つけることができなかった。

そこで、友人の作家太田治子さんに連絡を入れ、問い合わせてみた。現役時代、「日曜美術館」のプロデューサーを担当したことがあったが、太田さんは、その初代の司会者だっただご縁からかねてより付き合いがあった。太田さんの父は太宰治。太田さんだったらそのあたりのことが、少し分かるのでは、と思ったのだ。しかし、太田さんも、酒が大好きだった太宰が、「太宰権帥大伴旅人」の讃酒歌から取ったのは間違いないだろうけど、それ以上のことは分からない、という。いずれにしても、太田さんは、美術に造詣深く、独特の美的なセンスをお持ちの作家だが、万葉集にも興味関心を持っていることから「日めくり万葉集」の選者をお願いすることにした。もし文豪太宰が好きだった歌が分かれば、選歌の際 3 首の内の 1 首に入れてほしいとお願いし、担当ディレクターに引き継いだ。それから、1 週間後のこと、家に閉じこもって太宰や太田さんの作品、資料を読み漁っていた担当ディレクターからメールが入った。「あった！ ありました！」。文面から、女性ディレクターの興奮が伝わってくるようだった。「太宰と万葉集の接点がありました！」。太宰が、万葉集 4516 首の中から、自分の愛する恋人に捧げた 1 首が「あった」というのである。その恋人が太田さんの母太田静子さん。静子さんは太宰の『斜陽』の原著者で、そのモデルになった方でもある。そしてその歌は、

太宰の作品ではなく、太田治子さんが書かれた「明るい方へ」という、父太宰と母太田静子の真実を描いた作品の中にあつたという。このことを聞いて一番驚いたのが、当の太田さんだつた。自身のペンで書いた中に、太宰が愛した万葉秀歌が 1 首眠っていたとは！太田さんは、自分の著書のその部分を開いて、「思い出しました」と語り始めた。「太宰治から、私の母の太田静子に速達がきて、開けると、原稿用紙にこの歌だけが書かれていて……母はびっくりして、この方は死ぬんじゃないかと思って、もう慌てて（太宰が執筆で籠っていた）伊豆の旅館に向かって飛び出したということです。取るものもとりあえず、待っててください。死なないでくださいという気持ちで」。静子さんが家を飛びだした後、その太宰が訪ねてきて 2 人は行き違いになる。太宰は一晩中静子さんの帰るのを待つが、いくら待っても静子さんは帰ってこない、というドラマのような展開になる。

太田さんに尋ねた。「太宰は、一体なぜ、この歌を選んで静子さんに送ったのでしょうか？」。

「太宰は、太田静子の気を引くために、この歌を使ったんじゃないかと思います。それはとても、人の心を引く言葉を使うのが、大変にたけた人ですから。万葉集の中でもそれほど知られてはいないかもしれないけれど、これは人の心を動揺させますよね……もし私にこうゆう歌が送られてきたとしたら、やはり動揺しますね。早く会わないといけな、こちらも走っていきたいという気持ちに駆られる歌じゃないですか。太宰という人は非常に自己中心ですし、クールな所があっただけにですね、万葉集の中のあけびろげな所、大らかな恋する心、そういうものに憧れていたと思いますね。その相手として、太田静子という人は非常に無邪気な、真っ直ぐな人でしたので、万葉集の歌の世界に通じるものを、彼女の中に見出していたのではないか、というような気がします」。自分の著書の中に、太宰が好きな万葉秀歌があることを確認した太田さんから、「なぜそれに気がつかなかったのか」、その理由を聞いて分つた。本の執筆時、この歌を書いたことは覚えていたのだが、太田さんは、この歌の余りに抒情的なところと、なにより万葉集の歌の中ではほとんど知られていないこともあり、古今和歌集の歌と思い込んでいたのである。それが冒頭の 4080 番歌、大伴坂上郎女（おおとものさかのうえのいらつめ）の切ないばかりの恋歌だつた。坂上郎女は、太宰のペンネームのもととなった太宰帥大伴旅人の異母妹にあたり、万葉集の中でも 1、2 を争う女流歌人で、万葉集には 84 首の歌を残している。坂上郎女のこの歌は、確かに万葉集の中ではあまり知られておらず、それを、太宰が選んでいた、という、今回初めて明らかになった事実から、「やはり、太宰は、かなりのところまで万葉集を読み込んでいたのでは」と、監修者も指摘する。もしかしたら、それによって、この歌の評価が変わるくらいのインパクトがあつたのでは、ということで、ちょっとしたスクープとなつたのである。

さて、ここまで読んできて、査読をお願いしている高岡市万葉歴史館坂本館長はさぞかしイライラされたことだろう。「以前指摘した間違いを、また犯している」と。そう、本稿のその 2「万葉集由来の令和」の初稿の監修をお願いした時、「太宰府で太宰帥大伴旅人が開いた梅花の宴」という個所に、館長のダメが出たのだ。「『太宰帥』は『大宰帥』にしてください」という指示だった。調べてみると、確かに 7 世紀に九州地方の行政機関として設置された時は、「大宰府」であり、その長は「大宰帥」だった。しかし、平安時代以降「太宰府」と表記されるようになり、その使い分けについては今も研究されているという。現在は官名や歴史的な名称は点(、)のない「大宰」、地名や天満宮は点(、)がある「太宰」を使っているという。従って、「太宰府」までは許されても、「太宰帥」は明らかに「大宰帥」の間違いだったのである。ということで、私の原稿は間違っていたのだが、単に私にとどまらず、大伴旅人からペンネームをとった文豪太宰も同じ間違いを犯していたということになる。とすると、「太宰」のペンネームは、本来は「大宰」だったのでは？

さらには、大宰の恋人太田静子さんの「太田」という姓はどうか。「太」を「おお」と読ませるのはなんとも怪しい。これも調べてみると、「大宰」と同じく、奈良時代はすべて「大田」だったが、その後「太田」に変わったという。現在は「太」は、「た」、「たい」、「ふとい」という読み方しか知らないが、もともとは「ゆつたり大きい」とか、「大より大きい」という意だったという。従って、「太宰」と「大宰」、「太田」と「大田」の音義は、ほとんど同じという。そこで、現在は、「太宰」、「太田」が一般的に使われている。ただし、東京の「大田区」は、かつての大森区と蒲田区が合併したことから「大田区」になったとのことで、むしろ異例のようだ。

そこで、改めて「大宰治」である。点(、)が抜けているためか、どうにも間が抜けている感じがして、文豪の名らしくない。まあ、「太宰」の場合はペンネームでもあり、音義は同じということから「大宰」ナウとしてありうるかもしれないが、「万葉集宣伝係」である私の場合は、点(、)を付けたことは「失点」である。しかし、「失点」のおかげで文豪のペンネームについて新たな考察ができたのだから、怪我の功名、ミスを指摘いただいた坂本館長に感謝である。



大宰府政庁跡